## 射影変換とモデルビュー変換

2015年度情報可視化論

陰山 聡

2015.06.23

# 射影変換と同次座標

#### クリップ座標

これまではクリップ座標の立方体の中だけで描画していた。つまり ビューボリュームは正規化ビューボリューム

$$[-1,+1] \times [-1,+1] \times [-1,+1]$$

で固定であった。これは不便。

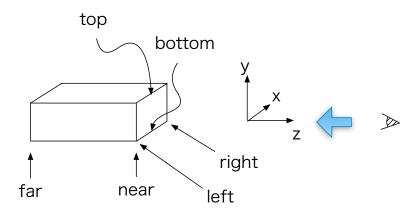
長さの単位(大きさ)を気にしないで、つまりワールド座標で物体を自由に定義したい。

## 射影変換

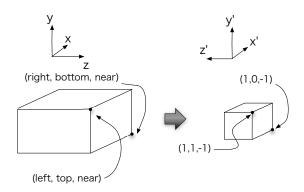
- 正射影
- 透視射影

#### 正射影

- カメラは $z = \infty$  に位置し、-z 方向を向いている。
- 正規化ビューボリュームの座標系は左手系。



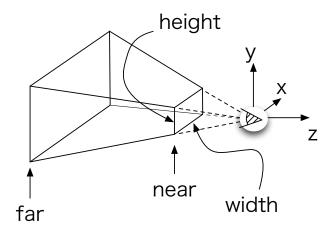
#### 正射影



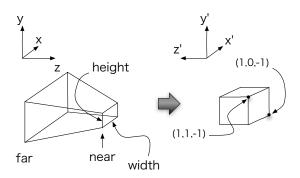
- 直方体から立方体(正規化ビューボリューム)への単純なスケール 変換行列。
- 自分で行列を設定するのも簡単だが、次の関数が用意されている
- mat4.ortho(left, right, bottom, top, near, far, projectionMatrix);

#### 透視射影

- カメラは原点に位置し、-z方向を向いている。
- 物体を回転・移動させればいつでも -z 方向に見えるようにできる。

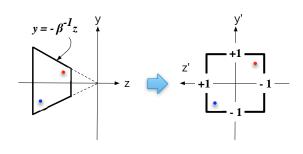


#### 透視射影



• 視錐台形から立方体への変換。

#### 透視射影



$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \\ z' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\beta x/z \\ -\beta y/z \\ c_1 z + c_2 \end{pmatrix}$$

 $\beta > 0, c_1, c_2$  は定数。 $x \ge y$  に関しては  $-\beta/z$  倍のスケール変換。

(このスケール係数は、たとえば、視錐台の上面  $y = -\beta^{-1} z$  が y' = +1 に変換されることで確認できる。)

## (復習)

平行移動変換

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \\ z' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x + t_x \\ y + t_y \\ z + t_z \end{pmatrix}$$

は同次座標を使うと行列演算で書けた。

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \\ z' \\ w' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & t_x \\ 0 & 1 & 0 & t_y \\ 0 & 0 & 1 & t_z \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ 1 \end{pmatrix}$$

では、透視射影

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \\ z' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\beta x/z \\ -\beta y/z \\ c_1 z + c_2 \end{pmatrix}$$

も工夫すれば行列で書けるか?

··· できない。

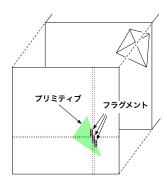
#### では、透視射影

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \\ z' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\beta x/z \\ -\beta y/z \\ c_1 z + c_2 \end{pmatrix}$$

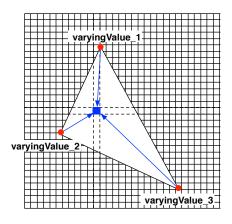
も工夫すれば行列で書けるか?

#### z補間の問題

- 透視射影の場合、もう一つ注意しなければいけない問題がある。
- 復習:フラグメントシェーダに渡される時の varying 値の自動線形 補間

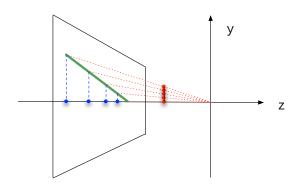


## z補間の問題

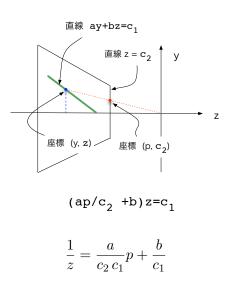


#### z補間の問題

- ピクセル(赤)が等間隔に並んでいても
- プリミティブ(緑)上の補間点(青)のz値は非等間隔。
- これは都合が悪い。



## 等間隔ピクセルpは等間隔の1/zに対応



そこでzの代わりに

$$z \Rightarrow z' = -\alpha - \gamma/z$$

という座標変換してz'をフラグメントシェーダ(プリミティブ合成ステージ)に渡せば、z方向にも自然に等間隔の線形補間になる。

(負のzに対して、 $\gamma > 0$ ならz'はzの単調増加関数である。)

 $-1 \le z' \le +1$  となるように  $\alpha$  と  $\gamma$  を調整する。

そういえば · · · 透視射影の x,y 成分も z の除算が入っていた:

$$\left(\begin{array}{c} x'\\ y' \end{array}\right) = \left(\begin{array}{c} -\beta \, x/z\\ -\beta \, y/z \end{array}\right)$$

#### そこで

ある点  $(x, y, z)^t$  に対して、

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \\ z' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\beta x/z \\ -\beta y/z \\ -\alpha - \gamma/z \end{pmatrix}$$

をプリミティブ組み立てステージに渡せばよい。(3成分全てにzの除算が入っていることに注意。) これを OpenGL では、次の2段階に分けて実行する。

## 透視射影変換の二つのステップ

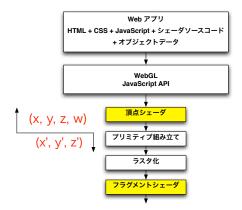
(1) 同次座標の行列演算。(この行列は一意には決まらない。ここで挙げるのは一つの例である。)

$$\begin{pmatrix} x^{\dagger} \\ y^{\dagger} \\ z^{\dagger} \\ w^{\dagger} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \beta & 0 & 0 & 0 \\ 0 & \beta & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \alpha & \gamma \\ 0 & 0 & -1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ 1 \end{pmatrix}$$

(2) w 座標での割り算。これを<mark>透視除算</mark>という。プリミティブ組み立て時に実行される。

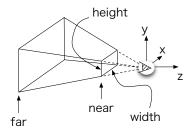
$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \\ z' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x^{\dagger}/w^{\dagger} \\ y^{\dagger}/w^{\dagger} \\ z^{\dagger}/w^{\dagger} \end{pmatrix}$$

#### パイプラインでの座標の処理



- (x', y', z') = (x/w, y/w, z/w)
- GPU が自動的に実行

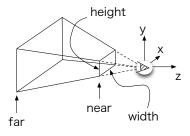
## 透視射影行列の設定



$$\left(\begin{array}{cccc}
\beta & 0 & 0 & 0 \\
0 & \beta & 0 & 0 \\
0 & 0 & \alpha & \gamma \\
0 & 0 & -1 & 0
\end{array}\right)$$

パラメータ  $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$  の決定  $\Rightarrow$  計算するのは簡単。

## 透視射影行列の設定



mat4.perspective(fovy, aspect, near, far, projectionMatrix); fovy (field of view) は視野の高さ(y)方向の角度。aspect は縦横比。

上下と左右に非対象な frustum(視錐台)を作る場合は、 mat4.frustum(left, right, bottom, top, near, far, projectionMatrix);

(ステレオ画像を作る時には、右目用の画像と左目用の画像が必要である。このとき、視錐台は左右非対称。)

# モデルビュー変換と射影変換

## 座標変換の実際

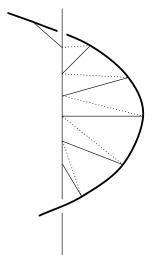
- モデルビュー変換
- 射影変換

について、あるオブジェクトに少しずつ座標変換をかけながらその効果 を見る。

#### サンプル 3D 物体

らせん状の物体を考える

中心軸とそれにまきつく螺旋の間を面でつなぐ



## $webgl\_sample\_spiral\_00.html$

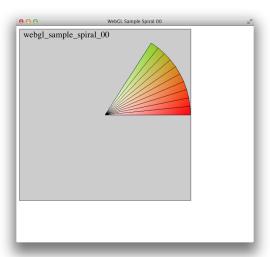
#### オブジェクトの構成部分

```
var dz = 0.1:
var pitch = 1.0:
var pof = 0;  // positionOffsetInFloats
var cof = 12; // colorOffsetInBytes
for (var k=0; k<Nz; k++) {
 var z = k*dz:
 positionView [ pof] = 0.0; // x
 positionView[1+pof] = 0.0; // y
 positionView[2+pof] = z; // z
 colorView[ cof] = 255; // R
 colorView[1+cof] = 255; // G
 colorView[2+cof] = 255; // B
 colorView[3+cof] = 255; // A
 pof +=vertexSizeInFloats;
```

```
cof +=vertexSizeInBytes;
phase = pitch*z;
positionView[ pof] = Math.cos(phase); // x
positionView[1+pof] = Math.sin(phase); // y
positionView[2+pof] = z;
colorView[cof] = 255*Math.cos(phase); // R
colorView[1+cof] = 255*Math.sin(phase); // G
colorView[2+cof] = 255*Math.sin(phase*0.2); // B
colorView[3+cof] = 255:
                                          // A
pof +=vertexSizeInFloats;
cof +=vertexSizeInBytes;
```

#### 結果

何も変換していないので、見にくい。正規化ビューボリュームから外れている部分が見えない。



## 演習

• webgl\_sample\_spiral\_00.html の dz(156 行目)を変えてその効果をみよう。

#### モデル変換

## webgl\_sample\_spiral\_01.html

モデルを移動・縮小・回転する行列 modelViewMatrix をつくり、頂点シェーダに送る。これも頂点属性 (attribute)。

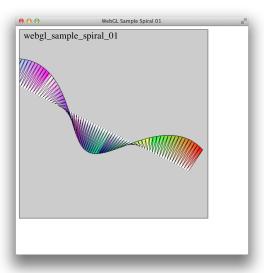
#### 頂点シェーダ

modelViewMatrix も頂点の attribute

復習:全ての頂点に共通した attribute 値は uniform

```
<! -- new -->
<script id="shader-vs" type="x-shader/x-vertex">
  attribute vec3 aVertexPosition;
  attribute vec4 aVertexColor;
  uniform mat4 uMVMatrix; //<--new
  varying vec4 vColor;
  void main() {
    vColor = aVertexColor:
    gl_Position = uMVMatrix * vec4(aVertexPosition, 1.0); //<
      --new
```

# スナップショット webgl\_sample\_spiral\_01.html



## 演習

 webgl\_sample\_spiral\_01.html の回転軸と回転角を変更してその効果を みよう。

## 射影変換

#### webgl\_sample\_spiral\_02.html

常に正規化ビューボリュームのサイズを意識してモデルを移動・縮小・ 回転を設定するよりも、ワールド座標(CG世界)の中にカメラを設定す る、と考えた方が自然。

⇒ 射影変換。

mat4.perspective で projectionMatrix を作る

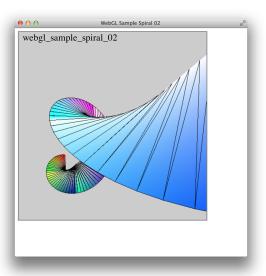
projectionMatrix を uniform として頂点シェーダに送る

シェーダではこの二つの行列をかける

gl\_Position = uPMatrix \* uMVMatrix \* vec4(aVertexPosition, 1.0);

このサンプルプログラムのこれ以外のポイントとして、デプステストとポリゴンオフセットがあるが説明は省略。

# スナップショット webgl\_sample\_spiral\_02.html



## 演習

webgl\_sample\_spiral\_02.html の射影行列の設定 mat4.perspective(...)
 を変更してその効果を見よう。

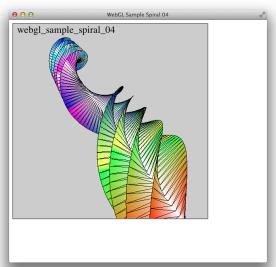
## 複数の変換行列の管理

描画する物体が複数の要素から構成されているときなど、カメラ(射影行列)は固定していて、モデルビュー行列は頻繁に更新してロードする場合には、モデルビュー行列のスタックを使うのが便利。(以前のOpenGL (OpenGL 1.x) には glPushMatrix(), glPopMatrix() があったが、今の OpenGL にはない。)

JavaScript には配列に push と pop のメソッドが備わっているのでこれを使えばいい。

## 練習

#### 螺旋型の面を位相をずらして5枚描く



# 変換行列の push と pop webgl\_sample\_spiral\_04.html

# 変換行列のシェーダへのロード webgl\_sample\_spiral\_04.html

## 描画 webgl\_sample\_spiral\_04.html

```
function startup() {
  canvas = document.getElementById("myGLCanvas");
  gl = createGLContext(canvas);
  shader_program = create_shader_program();
```

## 演習

• webgl\_sample\_spiral\_04.html を自由に変更してみよう。